



## ネイちゃんの言うとおりに

---

「ヘアーさんに告白されたの。」

エレクトラは顔を赤らめて、両手で頬を覆った。先生はもう若くもないのに、意外と奥手だ。

「いいじゃない。ウエディング！」

「だめなの、だめ！だってあの人名前知ってる？ショボイ・アンダーヘアーって言うのよ。私ムリ！」

「でも顔はカッコいいですよ。」

「しかも年下で可愛い。でも無理！エレクトラ・アンダーヘアーにはなれないわ！」

今日もワイワイ授業が終わる。

何故エレクトラは意外とモテる癖に、いつまでも独身なのか。不思議に思ったことがないではないけれど、こうやって話していると、エレクトラが意外と（二回目）現状に満足しているからだと分かる。

毎日十分に楽しいから、これ以上は要らないのだ。

「名前なんて、大きな問題じゃないでしょう？」

「そんなことない。名前が美しい人は、美しいものよ……心から。」

ベル—————

その頃クロマオーは、休憩をしていた。雲がかかった空は、やはり自分の心に沿うようだ。昨夜、顔も知らぬ、ベルの夢を見た。

ベルはマジシャンラタームに殺されて食われた、マゾクの女性だ。美しかったと聞く。ラタームは幾人も美しいマゾクを飼っていたので、きっとベルもショーのアシスタントだったのだろう。愛していたとラタームは言う。

ベルのことを思う時、クロマオーはマゾクとヒトを隔てるものの大きさに閉口してしまう。口を真一文字に閉じ、瞼がすこし震える。

ネイも、きっといつか、クロマオーを殺すかもしれないと。

もう要らないって言うかもしれないって。

その時の気持ちを、ベルは知り、永久に失われた。ベルは救われることもなく、無に帰した。

ねえ、ベル。僕はきみのことをこんなにも考えてる。

きみの心はもう地上にはないだろうか。

あるならば、救えるだろうか。

ベル

ベル—————.....。

いっしょ行こうよ！

---

「お祭りがあるの。私、謎の組織に狙われてて、護衛が必要だから、クロマオー一緒に行こう！」

ネイは新聞の切り抜きで作られた脅迫文をクロマオーに見せた。

オーガスタを祭りに行かしないと、ひよこを串刺しにする！  
焼いてタレかけて食ってやる！  
祭りは夜で危ないかもな！

「これ見たら、うちの商売的に有難いって工場長は言うんじゃない？」

「うん……でも、脅迫文って初めて作るからどう作ったらいいかわかんなくて……。」

「多分、人生で二度はないよ。ネイちゃん。」

「でも、良いて。クロマオーと一緒にいってあの人が言ったよ。」

ネイの策が功を奏したのかは分からないが、二人は夕方になる頃出かけることになった。相変わらず首には爆弾が巻かれ、ネイは門を越えるまで堂々歩く。

空は澄み切って、一番星が輝いた。あの星は、リンデリンデと言う。双子のように左右対称に輝く星だが、何故か片方が見えない。その理由は、祭りの方向からの強烈な光に、眩しく消されてしまっているのだ。

リンデリンデは今夜は一人で、時が巡るのを待っている。

ネイはご機嫌で、シロバンチョーとも落ち合うのだと嬉しそうに話す。秘密に胸がざわめいて、クロマオーは目だけが潤んだような光をまとう、ネイを見つめた。

遠くから騒々しい光と声が、届く。

祭りは商店街から広場までを、馬車などを通行止めにして行われている。入口の所で、広場で行われるショーの今日のプログラムが配られていた。

ラタームズマジックプラン～めくるめく奇想天外の世界へ～  
確かにそう書いてある。六時からだ。

顔をしかめたクロマオーに、ネイは数学のテストを見る時みたいな顔だ。  
断片的な記号ばかりで何が何やら。

「ラタームだよ。見てこうよ。話題の人だし。」

「そりゃネイちゃんは見たいだろうよ。」

「何その言い方。カンジ悪い。」

「あんなブサイクが舞台立っても、何の華もないだろ。」

「そんな……人を顔だとか、見た目判断しちゃダメだよ！実力のある人は……。」

「じゃあネイちゃんには好みがないの？」

「そういう話じゃないでしょ。」

「そういう話だよ。嫌いなもの、アイツが。ネイちゃんはおあいうのが良いんだ。変なの！」

ネイはぷいっと顔を背け、いきなり走って逃げた。ある程度距離を取ると、人ごみの中から、何事か叫んだ。

「聞こえないよ！」

ネイはそのまま背を向けて消えた。  
どうしよう。また爆破の危険が！

## 本当ですか、と問うことだ

---

ネイは人波をかきわけ、ぐんぐんクロマオーから離れて行った。

そうすることが、クロマオーには一番怖いと承知の上だ。

とても残虐な気持ちで、それなのに何も発散されず胸の中の血が濁る。

くろまおーのばか、ばか、ばか、きらい、きらい、だいきらい、しらない！

ずんずん進んでいくと、ひらけた場所に出て、特設のステージが見えた。スタッフの人達が慌ただしく準備をしている。もうまもなくラタームのマジックが始まるようだ。

見知った顔があるのに、気付いた。

ネイ「ヘアーさん！」

ショボイ「……おや、いつぞやのお嬢さん。」

ショボイ・アンダーヘアーはこの辺のこういった催し事の司会者の仕事をしている青年だ。エレクトラに告白してふられたばかりである。

好きな職業を体験実習するというのが前にあって、お手伝いさせてもらったことがあるので知り合いなのだ。もっとも、ヘアーにとって覚えてるのはエレクトラ先生で、おそらくはその教え子という付属品の認識だ。

恋の激情を彼は抑えるように、苦しい顔をする。



ヘアー「エレクトラ先生はお元気ですか？」

ネイ「ええ。あの人は寂しがる暇がないくらい忙しいから。私達生徒に囲まれてるし。でも、男の人は近くにいないかな！」

ヘアー「……好きな人がいるんじゃないんですか？」

ネイ「あの人の周りには子持ちの既婚者ばかりです。」

ヘアーさんは悲しい顔をした。

ヘアー「分かってるんです。私の名前では、愛されるはずがないって。エレクトラさんも恥ずかしいですね。」

ネイ「真剣に言われても……。」

ヘアー「ええ、分かってるんです。世の中の大抵の悩みごとは本人以外には笑い話なんです。だけど、そう、私は今まで好きになった四人の女性全員に、その名前ではマジ勘弁って言われます。」

ネイ「やっぱり、あの。」

ヘアー「何でしょう？」

ネイ「お金持ちになるとかしかないんじゃないじゃ……。」

ヘアー「私もそれをずっと考えてました。女性は金ですよね！」

金ですよね！と頷きながらもう一度言うと、ヘアーは準備があるからと去ってしまった。

金かしら。ネイは頭に誰かが浮かぶけど、今はまだ怒ってる。

## ラタームが生きていると知る

---

もうすぐ幕が上がる。

ラタームは助手のポチギに部屋から出て行くよう命令した。集中したいからだ。

ポチギは小声で何事か囁いてから、いなくなった。多分失礼しますとかそんな所だろう。

扉の戸締りを確かめるために一度席を立ち、今度は扉に背を向けて座る。

ラタームは胸に下げた革袋に手を差し入れた。

中には真珠のような、小さな玉が入っている。

ベルは瞳の綺麗なマゾクだった。青とも緑ともつかない、まるで海の色をしていた。

ベルが死んだ時、まず目をくり抜いた。生のまま口で転がし、噛んでみると、梅のようにぷりぷりした中に骨があった。

マゾクは眼球に骨がある。そんなこと死ぬまで知らなかった。

ベルのことを思い出すと、叫び出したいような気持ちになる。自分を保つので精いっぱいだ。

ラタームは指先で骨の玉をすかした。これはあの深い色をしていない。

だから姿を頭で再生する。心配ない。全てこの体に入っているのだから、再生出来ぬはずもない。

ラタームは骨を口に含んだ。飲み込まないように、壊さないように、丹念に転がす。

ベルのことを思い出すと訳が分からなくなる。感情の堰が決壊しないように、口から取りだす。

落ちつけ、馬鹿らしい。

マゾクだ、ただの。

今日ももうすぐ、幕があがる。

自分は自分の仕事をするだけだ。どんなに願っても、僕はベルにはなれなかった。

だから僕は僕のまま、生きるだけさ。

ラタームは立ちあがり、革袋にしまったその手で、シャツを脱ぎ着替え始める。

彼はプロのマジシャン。

ポチギは扉の外でじっと彼が来るのを待っている。

観客もまた、そうなのだ。



## 触れてみる

---

クロマオーは呆然としていた。どうしよう、ネイちゃんは僕を爆破するだろうか？  
たった一人でいるマゾクは人目をひく。クロマオーは人ごみにまぎれ、とにかく動くことで、自分を守ることにした。

ネイの行った方向に足を向け、進んで行くと、マジックの会場に出た。  
誰もが一心に舞台を見つめる中、カッコいい男の人がマイクを携えて登場した。  
男の人は背が高く、優しげな風貌で、いかにもモテる感じだ。  
ヒトが密集してこれ以上進めそうもなく、クロマオーはまるで隣りのヒトに連れられているマゾクのように装って、この場に今一時いることにした。

「皆さんこんにちは、ヘアーです！ショボイ・アンダーヘアーといいます。親に与えられた名前を悔やんでも悔やみきれない最近です。また女性に振られました。女性はやはり未来を見る生物なのではないでしょうか？つまり自分もアンダーヘアーになると！」

観客に嘔き出すものと不快を露わにするものと両極端の反応がでた。不快そうなのは小さい子供を連れていて、耳を一生懸命塞いでいる。ヘアーはいつもの紹介らしく気にも留めず、「ヘアーと呼んで下さい。それならピーが入らない！」とむしろ満足げだ。

「さてまずはパーリーキスの皆さんをお迎えしましょう！いでよパーリー！」

パーリーキスは三人組の美少女アイドルグループの筈だが、現れたのは下半身だけにタイツを身に付けた姿の細い男たちだった。男たちは胸にパーリーキス代理とガムテープで貼り付けている。

男たちによるとパーリーキスは今ロリコンにブチ切れていて、ロリコンだらけの会場には出てこられないという。

皆がどれだけパーリーの大人の色気にキテるか、気持ちを示して欲しいという。  
それを聞くとむしろ怒号のような激しい歓声が会場全体を揺さぶった。パーリー！パーリー！  
ロリータパーリー！

ヘアーはマイクを棍棒のように用い、男たちを叩きのめした。

「皆さん皆さん！私達は惑わされません！パーリーはロリータな魅力があるけど、25歳です！大人っぽさより可愛さに惹かれてしまう私達、そういう国民です！だってもう何年もきみを見てきた！出てきて！パーリーキス！」

パンと何かが弾ける音と、まき散った色とりどりのリボン、パーリーキスが可愛いフリフリの衣装ですくっと舞台に立った。

女性は25を過ぎると、どんな可愛い子でもすこし落ち着いた顔になる。パーリーは年相応の見た目だが、まだまだフリフリを着るらしい。三人とも飛び跳ねて、貫録たっぷりの低音で歌が始まった。

♪太ったわたし 大きなわたし  
どうでもいいひとに初めてをあげたわたし  
全部愛して うそ ほんとうは  
わたしだって こんなわたし 好きになれないわ  
くさいわたし ボーボーなわたし  
どうでもいいひとになり果てたわたし  
全部嫌って うそ ほんとうは  
わたしだって かわいいところ あるの  
気付いて 私を見て 彼女は理想  
理想は現実じゃないのよ

ギュイーンとギターが唸る。

横の一家がクロマオーに不審な目を向け始めたので、クロマオーは慌てて逃げの一手。

葉っぱを隠すのには森だと思ったが、

やはりヒトがいない所にいた方がより安全だろう。

今一番ヒトがいないのはどこだろう。

ふと、舞台の裏側の暗がりに目がいった。

## 暗闇の中で

---

ポチギという男の話をしよう。

ポチギはラタームの助手で、ヒトの男性だ。鼻が潰れ、目はあちこちを向いている。禿げて、声は小さい。

ラタームとの出会いは少年の頃、苛められていたポチギをラタームが救ったことにある。

ポチギはラタームの世話をよく焼いた。ベルがいた当時も、身の回りのことは全てポチギがしていた。

パンツやシーツの洗濯から、食事の世話、他のマゾクにベルがのけ者にされないように口利きまでした。

ポチギは誰が見ても、ずっとラタームに尽くしてきた。

そしてポチギは、独身である。

クロマオーは舞台の裏にそっと入り込んだ。華々しいステージの裏は暗がりになっていて、ヒトはおらず、マゾクが一人一応の見張りをしていた。

クロマオーが気安く挨拶をすると、普通に手伝いに派遣されたと思ったらしく、挨拶と頬笑みを返す。

光りを浴びた観客席がここからはよく見えた。ネイの姿を探していないふりをする。

裏は上を下への大騒ぎで、先日見た青い肌の美女マゾクが、五秒で服を着替えている。

なにぼーっとしてるの、手伝いなさいよ！っと叱責されて、クロマオーはとりあえず手近にあったマントを掴む。

そしてうろうろ見て回った。これだけで働いているように見えるらしい。

中を見飽きて、

（大体にしてマジックのタネは全部もう知っているのだから）

もう一度会場を見まわす。

ネイの薄茶色の髪が、光ったのを見た。

その横に、シロバンチョーがいた。

クロマオーは再び背を向ける。なんだか、完璧なものを見てしまった気がしたのだ。

その時だった。ふと、ポチギがこちらに目を留めた。まずいばれた！でも行く所なんてどこにもない！

クロマオーは瞳に懇願をのせ、ポチギを見つめた。曲がりなりにもベルを愛し、許容したことがあるヒト達だ。

落ち着いた様子で近づいてくるポチギに内心震える。

「ほ……ど……ど……」

多分外国語だと思う。だけど、声も小さいし、よく聞き取れない。ポチギはあらぬ方向を見た目をギョロリとクロマオーに視線合わせた。

「僕、あの、ラタームさんに言われて手伝いに来てます！」

「ヘウ……」

まだ納得のいってない感じのポチギにクロマオーは慌てた。

「僕、あー、ベルの友達です。」

「ハァー！ベル！」

ポチギは目を見開いて、今度は彼が出せる精一杯の声で叫んだ。（一般の面と向かった時に出す通常の大きさの声である。）

「あへ！あへ！あへ！」

迫りに気圧されて、一步後ろに下がったクロマオーに、処刑台に上り、今にも首を切り落とされるような声でポチギは呻いた。

「あへあへ……っ。」

クロマオーは逃げ出した。ただ、観客席の方にはネイがいた為、劇場の裏作業場に逃げ込んだ。唐突に、雷が落ちるように、クロマオーは理解していた。

A hateful bellue.

あ へ

これは隣の国の言葉で、「私は憎んでいる」という意味だ。

ポチギは、ベルが嫌いなのだ。

では、ラタームのこととは？

## 簡単な物語を紡ぐ

---

ラタームは舞台に、  
ネイとシロバンチョーは客席に、  
クロマオーは舞台裏に、  
ポチギはクロマオーを見逃したあとも外にいた。  
そのまま客席の後方にまわり、どこを見ているのか分からない目つきで、そこにいると決めたらしい足で立っていた。  
ポチギはずっと、舞台裏から出たことなどなかった。  
クロマオーは使われているマゾク達が、ポチギの指示を求めるように、視線を彷徨わせるのを見た。  
マゾクはここ十年、ヒトに使われることしかしていないから。

舞台上ではラタームが、新しいマジックを行うと言う。  
それはラターム自身が木の樽に入り、火を付けて、脱出するというものらしい。  
いよいよクライマックスだ。ヒトの命がかかる。  
これまでは剣に刺されるのも青い肌の、美しいマゾクだったから。

ラタームは木の樽に入った。  
もちろんこの樽は裏が開き、脱出出来るように出来ている。華やかなラストを飾るように、難しいものではなかったが火を使うマジックにすることにした。ポチギがそれが良いと言った。  
ラタームはベルが死んで以来ポチギに頼る度合いが大きくなったのを感じている。彼は人に相手にされないから、何を話しても問題がない。  
言う事を訊くし、甲斐甲斐しい世話も焼いてくれる。とても便利で、重宝していた。

ラタームはふと、ベルがポチギをどう思っていたらろうかと気になった。  
蓋を閉じながら、きっとベルもまたポチギを蔑んでいたに違いないと思った。  
ヒトであっても、彼は醜い。卑屈だ。  
ベルはマゾクであっても、目の覚めるような美しさだった。  
運命の恋だったのだ、とそう思う。

さて、脱出せねばならない。  
しかし、押しても引いてもビクともしない。ポチギという指揮者のいない舞台裏では、ラタームの無事を確認することなく、松明を樽に近づけた。  
あらかじめ油を塗った樽は光の柱を作るように、ぱっと燃え広がった。  
この世のものとは思えない悲鳴が、客席を揺らす。

ラタームは本当にベルを愛していた。

でもベルでは普通にヒトを愛すより、質が落ちることに気付いてしまった。

結婚も出来ないし、子供も生まれない。考え方も違った。

けどとてもあの青い目が好きだった。惹かれて、ずっといたいと思ってた。

あの夜、ベルは解放してほしいと泣き叫んだ。

「私はただの、あなたの奴隷なのだから……！」

今、身を焼く火よりもずっと、ズタズタに引き裂かれたラタームの心は、治る前に、あちらに逝ってしまいそうだった。

そこでは、マゾクとヒトは共にあるだろうか。

ラタームは、炎を消すことが出来ない水を滴らせた。

## 何もかもが難しくなる

---

ネイちゃん、僕は、

僕が見える範囲の全てを助けたいんだ。

僕は、僕に呆れている。

全てを見たいとも思ってるんだから。

クロマオーは舞台に駆けあがった。湧き上がる力が何なのか、クロマオーにもよく分からない。でも罪はきっと死ぬことでは償えないと感じたから、クロマオーは両手を振り上げて祈った。激しい雨が落ちてくる。

クロマオーは初めて、自分が雨を降らせるのだと気付いた。

自分にはチカラが眠っていたと知った。それは、助けたいという力。

樽は煙を吐きながら、燃え盛っていた火は抵抗しながら次第に小さくなっていた。シロバンチョーはずぶ濡れで樽をおろしにかかる。

ヘアーの誘導で、殆どの観客は屋内に避難していた。ネイは震えながらもクロマオーの横にいた。

不安な目をしている。きっとネイも気付いてしまったのだろう。

クロマオーが何にも出来ない、可愛いクロマオーでないことを。

ラタームはベルを愛していたのだ。

しかしその愛は終わった。それは、

きっとチカラが違ったからだと思う。

クロマオーがヒトだったら、こんな力を持つマゾクは恐ろしいし、不安に思う。

クロマオーは初めて死にたいと思った。やけになった訳ではない、胸にずっしりと死ぬべきだとすら思った。

そして逃げ出すことにした。

クロマオーは駆けだした。どこへ行くかなんて分からない。外出したことなど殆どないから、道も知らない。

すこしでもネイから離れたかった。そうすれば、死刑「宣告」を受けなくて済む。

死んだって良かったのだ。



シロバンチョーはラタームを救助することを優先した。ネイは追いかけたが、本気で逃げたクロマオーにはついていけなかった。クロマオーは人通りがないのを良いことに逃げに逃げた。

一部始終を見たポチギは、何事もなかったように舞台裏に戻り、可哀想なラタームを見下ろす。

これからは何にも出来ないね、ラターム……。

付き添ったポチギと病院に運ばれるラターム。

罪が罪を呼ぶ。何もかもが難しくなる。

ヒーローとクロマオーと。(8)に続く。